

県産トマト価格低迷の要因

1. 試験のねらい

トマトは、野菜重点5品目の一つとして首都圏農業を推進する上での重要な作目となっている。しかし、近年は市場価格が低迷し、一部で安定的な経営が困難になっている。そこで、市場価格が低迷している要因について解析をする。

2. 試験方法

農業センサス及び農産物流通年報等を基に消費や市場動向を調査し、価格低迷の要因を解析した。

3. 試験結果および考察

- (1) 平成3年までは、トマトの購入数量は徐々に減少し、その支出金額、平均価格は増加した。しかし、その後は概ね安定している(図 - 1)。このため、平成11年以降の価格低迷は、生産者が懸念する消費量減少による価格低迷とは考えられなかった。
- (2) 価格が低下した平成12年の東京都中央卸売市場(以後、東京市場)への入荷数量は、本県が千葉、茨城、熊本に次いで全国第4位であった。平成3年との比較では、本県からの入荷数量に大きな変化はなく、入荷数量の減少している産地は福岡、愛知であり、増加している産地は熊本、青森、群馬であった。特に、熊本は大幅な増加を示し、その増加率は2.1倍である。なお、輸入は極めて少ない(図 - 2)。
- (3) 東京市場の入荷ピークは、5月～9月である。5月に入荷量が多い産地は、本県をはじめ千葉、茨城、群馬の4県であり、9月に入荷量が多い産地は、青森、福島、群馬、千葉、茨城の5県である。入荷量が大幅に増加した熊本の入荷期間は、平成3年では11～3月であったが、平成12年は長期化し11～5月であった。このため、2～5月は、本県と千葉、茨城、愛知、熊本との産地間競争が激化している(図 - 3、4)。
- (4) 東京市場の単価は、平成11年まで概ね300～350円/kgの範囲であったが、平成12年には急落した。本県の単価は、東京市場と同程度の単価で取引された。平均単価の動きは、本県を除く主要4県は東京市場と相似形であった(図 - 5)。
- (5) 産地と東京市場の関係について、消費動向が安定している平成3年以降について調査した。東京市場の入荷量と千葉、茨城、熊本、群馬の年平均単価には負の有意な相関が認められた。千葉の入荷量と東京市場の年平均単価には、負の有意な相関が認められた。しかし、本県の入荷量と数量は、東京市場のいずれとも有意な相関が認められなかった(表 - 1)。
- (6) 各産地の年平均単価に順位を付け、その年次別順位から標準偏差を取り、平均入荷量を用いて散布図を作成し産地のグループ分けを行った。この図で本県は、入荷量が多く単価のバラツキが大きいグループであった(図 - 6)。

4. 成果の要約

本県トマトの価格低迷の要因は、東京市場の入荷量と単価の動きから、東京市場への入荷ピークが前進化、長期化し、全体の入荷量が増加したことであり、次に東京市場の入荷ピークと本県の入荷ピークが一致していることである。さらに、本県は入荷量が多いが、市場からの総合評価は低いと推測される。

(担当者 経営管理研究室 阿久津政行、伊藤浩)

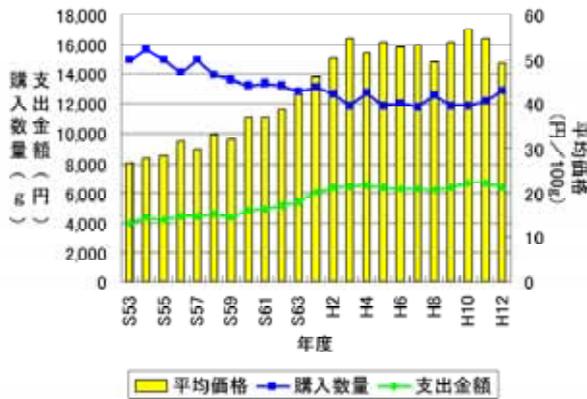


図-1 1世帯当たりのトマトの消費動向
(総務省家計調査より)

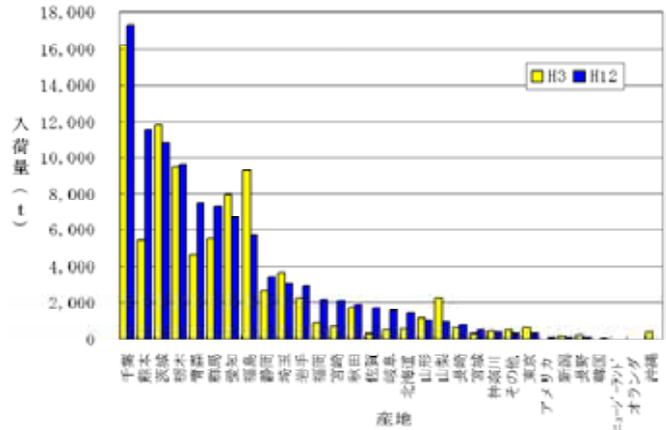


図-2 産地別東京中央卸売市場への入荷量

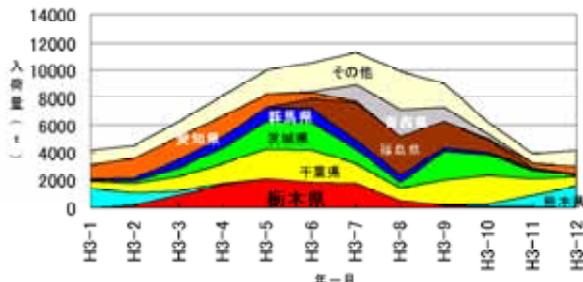


図-3 平成3年東京中央卸売市場の月別入荷量

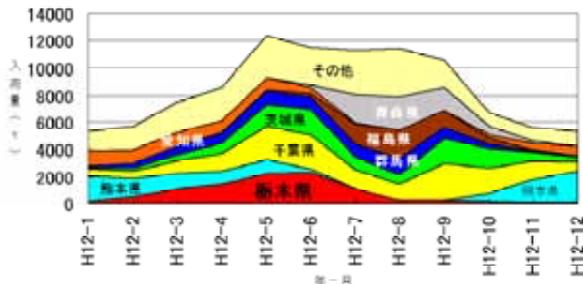


図-4 平成12年東京中央卸売市場の月別入荷量

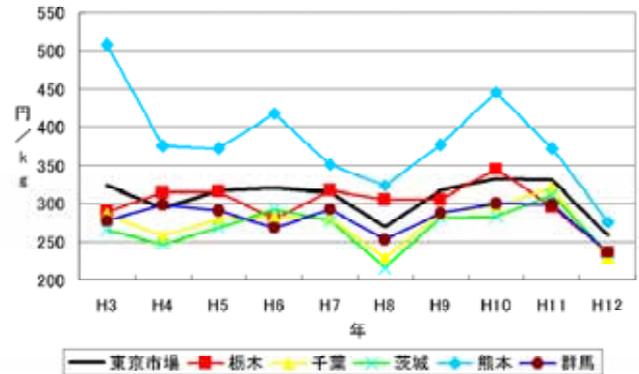


図-5 東京中央卸売市場の単価の推移

表-1 東京市場の入荷量と平均単価の相関係数

	栃木 入荷量	千葉 入荷量	茨城 入荷量	熊本 入荷量	群馬 入荷量	東京市場 入荷量
栃木 平均単価		-0.584	-0.212	-0.157	-0.335	-0.419
千葉 平均単価	-0.344		*-0.729	-0.491	-0.297	***-0.781
茨城 平均単価	-0.396			-0.581	-0.091	*-0.651
熊本 平均単価	0.039				*-0.643	***-0.834
群馬 平均単価	-0.528	-0.271	-0.125	-0.461		*-0.696
東京市場平均単価	-0.410	*-0.727	-0.389	-0.408	-0.381	

* 5%で有意、** 1%で有意

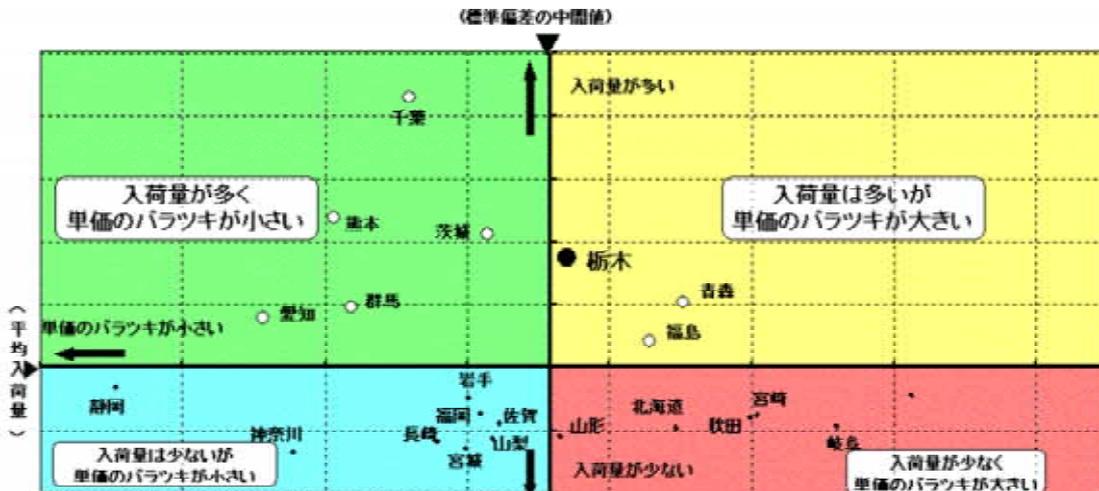


図-6 産地のグルーピング